

医療の誇りを取り戻すために

相馬市立向陽中学校 3年 杉本 葵

私の母は看護師です。一般的な職業の日勤とは違い、夜勤や日直などの当番が勤務に含まれています。休みの日に一緒に遊べなかったり、昼間仮眠をとっている時間に友達を家に呼べなかったり、幼い頃から、私達家族が受ける影響は少なくなかったと思います。しかし、人の命を守るために奮闘し、一生懸命医療の仕事と向き合う母の姿はとても格好良く、母自身も自分の仕事に大きなやりがいを感じているようでした。私達家族は昔から、そんな看護師という職業や、それを誇りとする母のことを尊敬していました。

しかしある時から、私は母の仕事や職業を周囲に隠さざるを得なくなりました。中学に入る前、母は私に、

「新しい友達ができたら、母親が看護師だなんて絶対に言っちゃダメだからね。」

と言いました。母の病棟が、新型コロナウイルス陽性者の入院を受け入れることになったからです。当時の世の中では、コロナウイルスは未知のウイルスとして恐れられており、医療従事者やその家族は、そんなウイルスを所有しかねない危険な存在だと見なされていたからです。我が身をリスクに冒しつつ、最前線に立って未知のウイルスと戦っている医療従事者の皆さんは、患者のみならず、ウイルスに怯える生活を余義なくされている非陽性者の私達にとってもヒーローであると言えます。そんなヒーローの一人である母の職業を隠さざるを得ない状況を作ってしまった世の中の風潮を、私はとても悲しく思いました。差別をしてしまうのは、赤の他人に対してだけではないのです。母の姉は、陽性者の看護に母が携わると聞いて、

「あなたがそんな危険に身を投じている事、あなたの家族は知っているの？」と母に言いました。私達一家を心配して出た言葉でもあったかもしれませんが、身内にさえも誇りに思っている仕事を“危険な仕事”と見なされてしまうことが、より一層私のコロナウイルスに対しての憎しみを増強させました。コロナ禍としても、人の命に携わり助けるために身を削る素晴らしい仕事であることは変わりません。「感染してしまうかもしれない」という誰の心にも存在する恐怖心が、ウイルスから周囲の人々を対象を変え、より多くの陽性者と関

わる機会を持つ医療従事者への差別を生み出したのです。ただ自分の身を守りたいという意志で、自分の安全を冒しかねる存在を恐れてしまうのは仕方のないことかもしれません。しかし、その存在を皆で敬遠し、軽蔑の対象とするのは違うと思います。誰もが持っている自身の仕事に持つ誇りが、そんな風潮によって打ち消されてしまうことは、決してあってはならないことです。新型コロナウイルスが流行する前、通っていた小学校の友達は皆、

「お母さん看護師なんでしょ？格好いいね！」

と、母の仕事に対して好意を示してくれていました。家族で共に住ごす時間を少なくさせる母の看護師という立場を憎まずにいられたのは、そんな周囲の人たちの応援のお陰でもあります。母自身の仕事に対するやりがいも、患者さんや周囲の人達の温かい声や言葉に支えられていると聞いたことがあります。そんな声が途絶え、嫌悪や差別の言葉に変わった時、やりがいを持ち続けることはできるでしょうか。ただでさえ、未知のウイルスと戦わなければならない不安や孤独感を抱いている中、やりがいさえも失ってしまった心では、きっと誰かの為の仕事と向き合い続けることはできないと思います。恐怖と戦っているのは、私達だけではありません。医療従事者の皆さんだって、ウイルスに怯え、「感染するかもしれない」という恐怖を払拭しきれない中、他にもない私たちのために戦っているのです。そんな彼らに私達が送るべきなのは、差別や偏見の矢ではなく、温かいねぎらいや励ましの言葉です。医療従事者の方々と共にウイルスと戦いぬくためにはそれが最も必要不可欠なことであり、医療従事者の家族として、確信を持って言えます。言葉は時に、人の心をえぐる刃になりかねないものです。しかし、使い方を換えれば、贈りものとして温かく人の心を照らすこともできるのです。

コロナ禍故の苦悩や困難が、私達医療従事者の家族にふりかかることは何度もありました。しかし、私は今でも母のことを尊敬しています。コロナに見舞われる中、社会活動や医療を最前線で支える姿を、一番傍で見てきたからです。そんな医療従事者の姿やその素晴らしさを、もっと多くの人に知ってもらいたいです。